

# 戦時下の文学 △その二▽

安 永 武 人

## 二 従軍作家の作品

一九三七（昭和十二）年は、日本が中国との全面戦争に突入した年であるが、その十二月には南京攻略、翌年五月には徐州を占領した。ひきつづいて十月に揚子江中流の武漢三鎮（漢口・漢陽・武昌）への侵攻作戦が開始されるにききたって、八月、軍は内閣情報部をつうじて職業作家をあつめ、各新聞社・雑誌社の特派員として、いわゆる「ペン部隊」を編成したが、それは「皇軍」のはなはなしに戦鬪や戦果を銃後の国民につたえさせ戦意昂揚をはかることを目的にしたものであった。<sup>①</sup>これに動員された作家たちは、丹羽文雄・林芙美子・尾崎士郎・岸田国士・片岡鉄兵・佐藤春夫・菊池寛・吉川英治など二十二名にのぼる。<sup>②</sup>かれらが従軍を命じられたとき、どのような感想をもったか、その真実のところを知る当時の資料はみあたらない。軍部が政治権力をほぼ完全に掌握した時代であって、

それぞれの文学をもっていたこれらの作家たちは、とつせん半強制的に従軍させられ、そしてその見聞を時局むきに執筆しなければならなくなった。そのとき、まったく抵抗感なしにその立場に自己をおきえた作家は、むしろすくなかったのではなからうか。

ペン部隊の一部にたいするいろいろのデマが飛ぶ。だがペン部隊の仕事はこれからである。私どもの書く報告的なものと違って深い彫琢を期待する。文学は一、二ヶ月にして書かるべきものではないと思ふ。私は藉すにモット時日をもってせよと言ひたい。<sup>③</sup>

というのは、改造社々長・山本実彦のこれら従軍作家たちへの好意ある弁護であるとともに、ほんものの戦争文学を期待した激励ともうけとれる発言であるが、ペン部隊編成からわずか三カ月たらずなのに「デマ」がとんでいたという事実は、なにを意味しているだろうか。山本の口調から察すると、おそらく従軍作家たちの書いたも

のが、たいして戦意昂揚の役割をはたさないものであったことには、いする非難があったのではないかと想像される。武漢攻略戦に従軍した作家たちの作品は、おおむね戦場の風俗的描写であって、かれらの予想をこえた兵士たちの労苦、それにもかかわらず兵隊たちに支配的な楽天的なあかるさ、戦場の素人であるかれらにたいする親切と人なつっこさなどへの恐縮と共感につらぬかれている。いわば、はじめて体験する戦場のはかりしれない巨大でめまぐるしい複雑な動きにたいして、まだじゅうぶんに対応しきれていない非戦闘員としてのとまどいや遠慮がいろいろくくでている記録がそのほとんどであつてみれば、威勢のよい従軍記を期待するむきからは、そのなまぬるさへの非難がおこつたとしてもふしきではない。陸軍省情報部長・佐藤大佐が「火野君にはその戦歴によって鍛へあげられた精神的堅実味がある。只の従軍文士でなく戦士である」<sup>④</sup>といつたのを、うらがえしてみれば、従軍文士たちの「戦士」とはよべない実績への不満の表明にはかなるまい。これらの「デマ」や不満がでてきたのは、従軍作家たちが、おのれひとりの日常的な孤独の生活から、いきなり戦場の軍隊という異常な組織的集団のなかにはうりこまれて、おくれげせながらその雰囲気や状態に適応しようと努力しながらも、なお、しきれなかつた事情が伏在していたのであろう。しかし、それもそうながい期間ではなかつた。急速に戦場に、したがっ

て戦時体制に順応する作家の姿勢があらわれてくる。南京陥落までと武漢攻略までとのあいだにも、その順応のふかまりの度合にちがいがみとめられる。南京陥落までの、たとえば林房雄「上海戦線」、三好達治「上海雑感」<sup>⑤</sup>などと、武漢作戦に取材した林芙美子「北岸部隊」、丹羽文雄「還らぬ中隊」<sup>⑥</sup>などでは、あきらかなちがいがあつた。林房雄の「はあい」「従軍ではなしに見物」「見学です」というのんきさがあるのにたいして、林芙美子や丹羽のは苛烈な戦闘にもっと身ぢかにたつている作家のせつぱつまつた心情がみられる。それにもかわらず全般的には「デマ」がとび「只の従軍文士」とせしられねばならなかつたのは、直接戦闘に参加した火野葦平や上田広・日比野士朗などの作品にくらべて、また傍観者のものならなさがあつたからにちがいない。しかし、個々の作家の内面についてみれば、おそらく権力的強制による従軍のなかで、戦争にかかわる文章をかきながら、しかもなほどこか自己の「文学」をまもり生かさねばならないという文学者としての立場におかれたかれらが、兵隊作家とはちがつて、そこに内心の苦渋を経験しなかつたはずはないのである。しかし、そのような作家内面の苦悩や抵抗があつたとしても、それを圧倒しておしながしながら、天皇制軍国主義の鑄型に国民ともどもはめこんでいくファシズムの強圧があつた。そしてそれは急速にその効果をあらわしていった。

私ごとき一文筆の徒に、殿下が拝謁を賜はるなどといふことは、夢にも思はなかつたことだ。(中略)私が拝謁室に入つて行くとき、殿下には長い間の陣中の御苦勞にも拘はらず御元氣の御様子で、映画人等と打ち寛ろいで御会談して居られた。(中略)私も作家としての感想を御求めになった。(中略)私はまた、日本の文学界はどうもせせこましくて、神經質すぎるやうな嫌があるから日本へ帰つたら、日本文学に大陸性を取り入れるため、慢々の(一寸待て、或はゆっくりといふ意味)運動をやるつもりです、と申上げた。すると殿下は御笑ひになつて「それは面白い、大いにおやりなさい」とかたじけなくも激励の御言葉を賜つた。<sup>⑤</sup>

という。これはひとり立野信之にかきらず、戦争の非日常的なスケールと動きに圧倒され、自己の文学をたやすく放棄し、時代に屈服していった作家たちの、文学喪失の過程をみごとに象徴しているといふことができる。文学喪失とか、さらには卑屈とかいう意識がないだけに、それはいっそう悲惨である。そこにはもはや自己をねじまげる苦痛は、そのかけりすらも認めることができない。

こういう状況のなかで、石川達三の「生きてゐる兵隊」は異彩をはなっている。戦闘記録が「文学」の名でよばれる「非文学」の時代に、それは文学とよぶことのできる実質をもった作品であるからである。

① 三枝重雄「言論昭和史」(日本評論社)一〇四頁。

② 「東京朝日新聞」(昭和十三年八月二十七日)。ほかに久米正雄・白井喬二・吉屋信子・北村小松・川口松太郎・杉山平助・小島政二郎・滝井孝作・富沢有為男・中谷孝・浜本浩・深田久弥・浅野晃・佐藤窓之助の名がみえる。

③ 「無題録」(「改造」昭和十三年十二月号)。

④ 「麦と兵隊を読んで」(「改造」昭和十三年十二月号)。

⑤ 「中央公論」(昭和十二年十月号)。

⑥ 「改造」(昭和十二年十一月臨時増刊号)。

⑦ 「婦人公論」(昭和十四年一月号)。

⑧ 「中央公論」(昭和十四年一月号)。

⑨ 立野信之「漢口の時鐘」(「改造」昭和十三年十二月号)。

1

「生きてゐる兵隊」は一九三八(昭和十三)年三月号の「中央公論」に掲載されたが、たちに発売禁止という行政処分をうけたばかりでなく、新聞紙法違反として司法処分にもとわれるという、戦時下でもほかに例のない弾圧をうけた小説である。その裁判の判決本文は、

被告人石川達三及同雨宮庸蔵ヲ各禁錮四月ニ、同牧野武夫ヲ罰金

百円ニ処ス。

但被告人石川達三及同兩宮庸蔵ニ対シ各本裁判確定ノ日ヨリ三年間右刑ヲ執行ヲ猶豫シ、同牧野武夫ニ於テ右罰金ヲ完納スルコト能ハサルトキハ金五円ヲ一日ニ換算シタル期間同被告人ヲ勞役場ニ留置ス。

というきびしいものであつた。石川のばあい、判決理由をみると作品から四カ所を引用して「皇軍兵士ノ非戦闘員ノ殺戮、掠奪、軍規弛緩ノ状況ヲ記述シタル安寧秩序ヲ紊乱スル事項ヲ」「執筆シテ之ニ署名シ」たことが、罪になるとされている。この小説が「安寧秩序ヲ紊乱スル点ハ判示掲載事項ノ行文自体及今次支那事変力現ニ繼續中ナル公知ノ事実ヲ綜合シテ之ヲ認ム」というのであるから、「支那事変力現ニ繼續中」という情勢への八田卯一郎判事の迎合的な政治的判断があつたということとどまらず、石川の作品の「行文自体」をその理由としてかかっていることに注目しなければならぬ。「行文自体」、いいかえれば、このばあい「判示掲載事項」として引用されているのは石川の戦場描写だけであるから、描写そのものを問題としていふことになる。したがって石川のような作風をもつ作家にとつてみれば、かれの文学の思想・方法そのものが否定されたということになるからである。してみると、これはひとり石川にたいしてばかりでなく、戦時下に活動するおおくの作家たちの

「文学」のありかたそのものへの警告であり、もはや権力がわの思想から独立した自由な「文学」の創造が不可能になつたことを法の名において宣言する判決であつたといつても過言ではないであらう。しかも、それが、「殺戮、掠奪、軍規弛緩ノ状況」の描写を事実無根として告発しているのではなく、「安寧秩序ヲ紊乱スル」というばくぜんとした、主観的裁量の余地のおおい理由であることは、そのあと文学の自由をまもつてたたくことを、いっそう困難にしたであらうし、それだけに、このことが戦時下の作家たちの文筆活動にたいする無言の威圧となり、さらには権力の許容範囲をおしはかるめやすとなつたであらうことは、推測にかたくない。

ところが、この事件にまきこまれた石川達三と「中央公論」の編集者の、その発表にあつての心事について、平野謙は「すくなくとも、戦場の残酷を残酷として描写することが重大な筆禍事件を招来するとは、作者も編集者も充分豫期していなかつたのではないか」といい、その理由として、この作品は、

戦場の残酷がいわば常識的な残酷として、制作以前に前提されている趣きがあつた。（中略）さまざまな人間類型を一応は描きわけ、それらの人間的な哀歎悲苦を非情に押しながす戦争のすさまじいメカニズムを主題にえらびながら、その非情を安易にひとつの必然と肯定することによって、一種の戦争風俗小説以上にぬけ

ることができなかつた。しかも、そういう作柄自体が告発起訴  
というような筆禍事件をよびおこした。<sup>11)</sup>

としている。が、これとはちがつて当時その編集部にいた畑中繁雄  
は「そのとき多少予感された危険をおかしてまで、なお掲載に踏み  
きつた私どもの心理のうちには、奢れる、戦争指導者にたいするう  
っ積した憤りや、いわれなき、戦争への私どもの不満が微妙に作用  
していたことも事実であつた」と回想し、編集長・雨宮庸蔵の同様  
の意味の述懐もあわせて紹介しているから、平野の解釈とはちがつ  
て、当時の編集者たちに抵抗の心事があつたことは事実としてみと  
めねばならぬであらう。ところで、「みずから現地従軍を希望して  
いた」という石川じしんはどうであつたか。「削除の赤インキの入  
つた紙屑のやうな初校刷を中央公論から貰ひ受け、爾來七年半、深  
く筐底に秘してゐた」この作品が、敗戦の年の十二月、河出書房に  
よつてはじめて読者のまえに完全な姿をあらわしたわけであるが、  
その「誌」「つまり「まえがき」に「この作品によつて刑罰を受け  
るなどとは豫想もし得なかつた。若気の至りであつたかもしれな  
い」とあり、さらに、その創作動機について、公判中、判事の質問  
にこたえて、

国民ハ出征兵士ヲ神様ノ様ニ思ヒ我軍カ占領シタ土地ハ忽チニシ  
テ樂土カ建設サレ支那民衆モ之ニ協力シテ居ルカ如ク考ヘテ居ル

カ戦争トハ左様ナ長閑ナモノテ無ク戦争ト謂フモノノ真実ヲ国民  
ニ知ラセル事カ真ニ国民ヲシテ非常時ヲ認識セシメ此ノ時局ニ対  
シテ確乎タル態度ヲ採ラシムル為メニモ本當ニ必要タト信シテ居  
リマシタ<sup>12)</sup>

といい、戦後のこの初版でも「あるがままの戦争の姿を知らせるこ  
とによつて、勝利に傲つた銃後の人々に大きな反省を求めようとい  
うつもりであつた」し、「戦場における人間の在り方、兵隊の人間  
として生きて在る姿」を描こうとしたともいっていること、また裁  
判當時のかれの文学者としての決意をしめすときの発言などは、検  
討すべき問題をもっている。

第一審の検事はその論告のなかで、「この種犯罪の中に於ける最  
も悪質なるものであり、最も重く処刑すべし」と言つた。私はこ  
の論告に憤然として（此の種犯罪の中に於ける最も良質なるもの  
と確信する）と裁判長に向つて言つた。その目的に於て、動機に  
於て、責めらるべき筋のないものならば、たとひ結果がどうあら  
うとも（最も悪質）といふ結論が出てくる筈はない。作家は、彼  
が良心ある作家であるならば、たとひ生命を犠牲にしても（最も  
悪質）といふ論告をそのまま受け容れることは出来ない筈だ。  
（中略）国家社会に対する私の良心を擁護しなければならなかつ  
た。作家が、據て以て立つ自己の精神を守らなければならなかつ

た。<sup>⑤</sup>

まず、ここにかれがいう「あるがまゝの戦争の姿」「戦場に於ける人間の在り方、兵隊の人間として生きて在る姿」とはなんであろう。あとで詳しくふれるようにこの作品がぜんたいとして描きだしているのは、戦闘の渦中におかれた軍隊組織のなかで、兵隊にとられるまではさまざまな生いたちをせおってきた人物たちが、徐々に人間性と知性を喪失し、あるいはみずからそれらを鈍磨させて、もっとも日本軍隊がつよく要求していた兵士らしい兵士へちかづいていく過程——非人間化することによって有能で模範的な盲従兵士にむかつて必死に自己をつくりかえていく戦争道具化の過程にはかならない。その過程にうまれるさまざまな苦悩や懷疑は、あるときは時間の経過によってなしくずしに、あるときは意識的に、しかも積極的に克服され、いっさいの知的なもの、合理的なものが抹殺され、ひたすらに動物化していく。ここまでは火野葦平の「麦と兵隊」も肯定的な立場からだが、描きだしている。しかし、そのような自己のつくりかえの結果がひきおこす殺戮、掠奪、暴行の「ありのままの姿」は、この作品しか描いていない。そのような「皇軍兵士」の非人間の実態によって「勝利に傲った銃後の人々に大きな反省を求めよう」としたというのは、言論・思想の統制のための体制がためを著実にすすめていた軍部支配の実情にたいする認識のあま

さからくる「若氣の至り」であったともいえようが、それはかりでなく、その「若氣」にはかれらしい国士的氣概もこめられていたのだ。が、さてそういうかれが期待したのは、どういう反省だったのか。おなじくこの「誌」に「言論の自由を失った銃後は官民ともに乱れに紊れて」<sup>⑥</sup>いるという状況判断がある。この「銃後の人々」とは「官」とそれにつながる一部の人びとを中心に、かれらにかざれている国民をさしたと考えるのが妥当であろう。そこに「蒼氓」や「日蔭の村」をつらぬいた反強権の立場や政治的社会的関心のつよさをおなじように認めたとしても不自然ではないはずである。とすれば勝利に酔いしれて戦争指導への謙虚な反省を欠いている官僚を中心とする上層部と、それにひきずられて善意の国民をみたとき、かれの危機感はつよめられ、その歪みをただすために戦争の非人間的悲惨の実態をつきつけ、戦争が新聞などの報道とどりのきれいごとでないことを示そうとしたといえるであろう。それはかならずしも戦争そのものの全面的、根本的な否定を意味するものではない。しかし、現に進行中の戦争を文字とどり「聖戦」とは認めない、現実を直視するするどい精神がかれにあったということは指摘しておかなければならない。したがって、「兵隊の人間として生きて在る姿」の実態を描くことで、平野謙の解釈とも、また兩宮や畑中などの編集部のみそかな抵抗の心事ともちがって、「ありのま

ま」を国民に認識させることを当然とする、また国民がそれをうけいれるはずだとする、したがってそれが処罰されるなどとはおもしろもおよばなかった時代状況への素朴な認識があった。つまりあとで「若気の至り」というほかはなかった、国民と政治への信頼と強烈な義務感があったのだ。警視庁での訊問にたいして「聖書ノ真ノ意味ヲ探ルコト、クリストノ教ヘノ意義ヲ知ルコトヲ自分ニトツテモ意味深イコトデ此ノ意味デハクリスチャント云エルト思ヒマス」とか「文学界ニタツサハル身トシテ今少シ左翼思想ノ長所ナリ欠点ナリヲ知り尽シテ正シイ批判ヲモツ事ハ私ニハ必要ガアル」とか、発禁処分について「窮屈ナ世間ニナツタと思ツタ」<sup>⑩</sup>などとこたえているのは、すでに人民戦線事件が国民の恐怖心をかきたてるために喧伝され、ひきつづいて矢内原・河合両東大教授の著書発禁、休職事件がひきおこされようという時点であるだけに、時代認識のあまざというにとどまらないで、やはりかれの抵抗精神の噴出があるといわねばならない。そこにはかれのきびしい現実直視と真実を隠蔽するものへのはげしい糾弾の精神とをみることができる。それはかれの文学の根本にある思想と方法につうするものであった。だからこそ、検事の「最も悪質なるもの」とする論告にたいして、「最も良質なるもの」と揚言してはばからなかったのであるし、「国家社会に対する私の良心を擁護」したといえたのである。「作家が據っ

て以て立つ自己の精神」とは、かれ石川にとつて、文学を創出する思想と方法であり、公判廷におけるかれの発言はそれを抹殺しようとする官権へのはげしいたたかいの精神からする抵抗であったといわねばならない。したがって、ファシズムの強圧に、昭和文学がおおきく転換をよぎなくされたいわゆる「戦争文学」の時代の開幕にあたって、人間形象の一面的であるという弱点をもちながらも、戦争の非人間性を描きだしたかれの「文学」は、ほかのおおくの作家が平野のいう「戦争風俗小説」におちいったのにくらべて、まったくその質を異にしているというべきであろう。事実をみうしなわないかれば、事実をもとにして、一篇の作品を虚構し真実を提示した。その虚構における種の失敗は、虚構を放棄した他の作家の「風俗小説」よりも評価されねばならぬことはあきらかである。だが、それを「まだ何人も試みなかった」新奇さをおいもとめる「文壇の野望」<sup>⑪</sup>の作品とつけとる当時の批評は、戦後にもうけつがれていゝる。はたして、そういう理解のしかたでよいだろうか。

⑩ 司法省刑事局「思想月報」第五十号三〇五頁。なお雨宮は「中央公論」の編集長、牧野は同発行人である。この第一審判決の内容は検事控訴による第二審でもおなじであった。

⑪ 「現代日本文学史」（筑摩書房「現代日本文学全集」別巻・Ⅰ）四四四頁。

⑬ 「覚書昭和出版弾圧小史」(図書新聞社)一五八頁。

⑭ 第一審公判調書。

⑮ 河出書房初版「生きてゐる兵隊」一〜二頁。

⑯ 警視庁・清水文二警部の聴取書。

⑰ 宮本百合子「昭和の十四年間」(河出書房)宮本百合子全集「第七卷所収」三四九頁。

⑱ 小田切秀雄「作家論」(世界評論社)一八〇頁。

2

「生きてゐる兵隊」は一九三七(昭和十二)年十二月の南京攻略戦の参加部隊を描いている。その焦点は高島師団西沢連隊の倉田小隊におかれ、この小隊の兵士たちの戦場における「生きて在る姿」が集団としてとらえられている。この作品は戦時下に公刊された作品のなかで、国民にまったく信頼されていた「皇軍」兵士の非行をまっごうから描きだしたただひとつの作品である。そのまねな事例であるゆえをもって「文壇的野望」のあらわれとみたり、あるいは戦後に流行した「暴露もの」と同列にあつかったりするのはたゞしい理解とはいえない。もし、そういうものならば、この作品の中心にすえられている倉田小隊の、倉田小隊長・平尾・近藤など、いわゆるインテリ出身兵士たちの知識人として、また人間としての崩壊過

程を、作戦の経過にしたがつて、これほど克明に描きたす必要はなかったはずだ。作者の筆が、日本軍隊の前近代性格が集中的に凝結している笠原のような兵士の残虐非道の行為を描くことよりも、戦闘部隊という組織的・状況的制約のなかで、インテリ兵士たちがいやおうなしに笠原のような兵士に自己をきりかえていかねばならなかった苦悩の内的過程を描くことに、よりおおくついやされていゝる事實は、いわれるように単純な性格のものとしてかたづけられない意図がこの作品にあることをしめしているし、事実、かれは、作中ノ笠原伍長ハ労働者、平尾、近藤ハインテリ出身デアリソノ三人ヲ比ベテ見テ「インテリ出ノ兵ハドウナルカ?……」ト云フ目下ノ問題ヲ考エテ見様トモ思ツタ<sup>②</sup>と証言し、当時、おおくの知識人をとらえていた、この戦時下にかに生きるかという課題をふまえながら、知識人を戦場へはうりこんだばあい「ドウナルカ」の実験をこころみる意図のあったことをものがたっている。さらに、それはかりでなく、のちの太平洋戦争下のおおくの学徒出身兵の心的葛藤を、すでにこの時期に描いていたという意味をももちえていることをみのがしてはならないであろう。それは日本の「近代的」知性が、ファシズムをささえた天皇信仰や狂信的國家主義や反近代的・反合理的精神主義に屈服してゆくみちすじであり、登場人物の主観にそくしていえば、兵隊らしい兵



隊にならねばならぬという戦場における至上課題にむかって自己をつくりかえてゆく過程にはかならなかつたのである。

それを出征まえまで郷里の小学校教師をしていた倉田小隊長についてみると、どうであろうか。また戦闘ずれをしていないかれは「童心に与へる衝動といふことを考へて逡巡しながら、もうみんなに会ふこともあるまいと思ひますと書いて見た。その一句は童心に影響を与へる前に彼自身の心に影響を与へた」ほどのかんじやすい青年将校である。そのかれは直前の戦闘で部下の数名をうしなつていた。

俺は生き残つた。不思議な気がしてならない。生き残つてゐる。それが何か焦立たしい落ちつかない氣持であつた。もしかするとこの焦立たしさは死ぬまで続く不安であるかも知れない。突然、彼は激しい戦争をしなくなつた。今度戦線に立つたならば滅茶々に突き進んでやらうと思つた。すると顔が火照つて慄悸がはげしく打つて来た。

愛すべき部下をうしなつたという精神的な打撃——そこには「部下と対してゐる時には、小学校の先生の平和な情深い感情に自分で負けてゐる」ようなかただったから、あいすまぬという感情がつよくはたらいっていたらう。しかしそれとともにかれ自身の死への恐怖もふくまれている。その恐怖の苦痛は、しやにむに激闘のなかに自

分をおくことを期待させる。戦友との連帯と死への恐怖とが、倉田のはあい、かれの人間をつくりかえる根源的な力として作用していることをみのがすわけにはいかない。かれは戦闘のあいまに毎日かかさず日記をつける。死ぬまでの自分のことを他人に知ってもらえないのは淋しすぎると思える。「それは常識的な感情ではあつたが、彼は何としてもさういふ氣持を棄てて一つは、めをはづした精神までは行き切れなかつた。そのために彼は焦立たしい不安に責められ、何でもいゝから早く死なうと思ふやうになつて来る」。常識のりこえた非常識な精神を、いわば、世の非常識を常識とするような精神が、まだしつくりと自己のものになつていない、自己の死はもとより、他人の死の不安からも解放される境地にいたりえていないらだちが、そこにはあるのだ。戦場いせんの日常性をいまだひきすつていて、戦闘のしいる非日常性を戦場における日常とすることができずに苦惱している魂のうめきがそこにはききとれる。「兵隊は戦場にあつては戦ふべきもので反省すべきではない」とみすからにいいきかせるかれの自己強制的な「勇敢さはその裏をかへせばむしろ感傷的な温和さが表はれて来る」と作者によって指摘されるような、まだ行動と内面とが渾然一体となつたとはいえない状態であつたのだが、それが一転する機会がおとされる。

彼の今日までの落ちつかない不安と焦躁と、そして彼の勇敢さと

は内面を割って見れば生命の危機に立っての本能的な恐怖であった。しかし中隊長の戦死を眼の前に見たときからその恐怖はもはやひとつ桁をはずれたものとなった。それはある種の実感の飛躍であり、また陥落であった。あるひは自己の崩壊を本能的に避けるところの一種の適応としての感情の鈍麻であったかも知れない。すると彼は心の軽さを感じこの生活の中に明るさを感じはじめた。その明朗さは穿撃すれば底ふかく暗黒なものを包んであるやうでもあつたけれども、いま彼は絶対にその穿撃を自己に加へることを欲しなくなつてゐた。そして彼は心のひろがりを感じはじめた。それは一種の自由感であり、無道德感でもあつた。とりも直さずそれは無反省な惨虐性の眼覚めであつた。彼はもはやどのやうな惨澹たる殺戮にも参加し得る性格を育てはじめたのである。

陣頭にたつた中隊長の果敢な突撃と死、常熟総攻撃二十四時間の激闘と緊張が、この背景にある。しかし、それだけをかれの転機の理由とすることはできないだろう。この命がけの体験が、死の恐怖からかれを解放した、いかえれば非常識が常識となり、非日常が日常となつたのである。自己分析や反省をみずからつよく抑止することによって、そのすさまじい体験がかれの内心にひきおこしたあらたな感覚のみを忠実に維持し、固定しようところがければ、そこ

にいままでとちがつて、凄惨な戦場に適應できる人間がうまれる。思想とモラルの重圧から脱出した人間の、のびやかな明るさと安定がそこにはある。こうして、つよい、たくましい兵隊が誕生する。

「今では死なうと焦る気持もないし自分の感情が支へきれないほど掻き乱されることもなかった」「一人の軍人として、一人の国民として、重い義務を負うて行動する場合の一つは、めをはづした心の状態を身につけることができた」倉田は中隊長代理がりっぱにつとまる軍人にまで、かんじやすい小学校教師から自分を戦場と戦闘のなかできりかえたのである。これは、戦時下における日本インテリゲンチヤの特異な姿ということではできない。むしろ、おおくの日本人が、戦場においてばかりでなく、銃後においても、外圧によって強制された自己改造であつたにもかかわらず、あるところまでくると、もはや外圧とも強制とも自覚しなくなり、改造された自己をもつて、真実の自己を再発見したと錯覚した——そのことによって日本軍国主義の積極的な担い手となつていった姿をも、描きたしえているといわねばならない。そこに石川のこの作品が、ほかのほとんどの作家のように従軍記録におちいらないで、虚構を武器とした文学としてのつよみをもつたことができる。このような知識人の崩壊過程は、平尾・近藤についてもそれぞれちがつたみちすじとして描かれているが、ここでは省略する。ただ、知識人として、人

間として、ひとつの決定的な場面に直面したばあいの動きがどのよ  
うなものとして描かれているかをみておきたい。それは、判決理由  
において、「判示掲載事項」のひとつとなった場面である。

常襲を突破し、つきの要地無錫の攻略にむかう。倉田たちは、陣  
地について攻撃命令をまわっている。ところが、ちかくの農家から女  
の泣き声がきこえてくる。母親が流弾にあたって倒れ、それにとり  
すがって泣いている十七、八の姑娘がいるという。夜がふけるにつ  
れて「かすかな感傷が壕の中をより静かに」する。「かういふ時に  
なつて急にはげしく兵士の耳に聞えて来たのはさっきの姑娘の泣き  
声であつた」「聞いてゐる兵士は誰も何とも言はなかつたが、しん  
しんと胸にしみ透る哀感にうたれ更に胸苦しい氣にさへもなつてゐ  
た。はげしい同情を感じ、同情を通り越してからはもの焦立たしい  
氣になつてゐた」——ここには、「号泣」や「涕泣嗚咽」の声をき  
いている兵士たちの心理のうごきが、たくみに描きだされている。  
母親をうしなつた若い娘の境遇や氣持をおもえば、誰しも同情をか  
んじるだろう。その同情をすなおに肯定する立場にたてば、そうい  
う悲惨をひきおこす戦争そのものを呪ひ、否定せずにはいられない  
ところにまでゆきつくはずである。いいかえれば女の泣き声は、兵  
士たちに、ひさしく忘れていた人間らしい感情をよびおこさせるよ  
うにはたらきかける。しかもみずからはその否定すべき戦争にげん

に参加している。だから兵士たちは、女の泣き声によって二者択一  
をせまられる立場においこまれ、しかも人間的であることに徹する  
道をえらびとることのできない日本軍隊の一員なのだ。が、内心の  
同情もまた人間であるかぎり、ように抹消しざることのできるも  
のではない。「頭の蕊が掻きむしられるやう」になつたのは、倉田  
少尉ばかりではなかつた。

「えゝうるせえッ！」

ふりかへると、真暗な中で平尾一等兵が背を丸くして壕の上に飛  
び上る姿が大空の星を背負つて見えた。

「どこへ行くんだ？」と壕の中から近藤一等兵が言った。

「あいつ、殺すんだ！」

平尾一等兵はさう言ひすてて銃剣を抱いたまゝ低くなつて駆けだ  
した。すると、五、六人の兵がだだッ足を踏み鳴らして壕のふ  
ちを走り彼のあとを追うた。

彼等は真暗な家の中へふみこんで行つた。砲弾に破られた窓から  
射しこむ星明りの底に泣き咽ぶ女の姿は夕方まゝに踞つてあ  
た。平尾は彼女の襟首を掴んで引きつった。女は母親の屍体を抱  
いて放さなかつた。一人の兵が彼女の手を捻ぢあげて母親の屍体  
を引きはなし、そのまゝずるずると下半身を床に引きつりながら  
彼等は女を表の戸口の外まで持つて来た。

「えい、えい、えいッ！」

まるで氣が狂ったやうな甲高い叫びをあげながら平尾は銃剣をもつて女の胸のあたりを三たび突き貫いた。他の兵も各々短剣をもつて頭といはず腹といはず突きまくつた。ほとんど十秒と女は生きては居なかつた。彼女は平たい一枚の蒲団のやうになつてくたくたと暗い土の上に横たはり、興奮した兵のほつた顔に生々しい血の臭ひがむつと温く流れてきた。（傍線は伏字）

この凄惨な場面そのものをここで問題にしよつたのではない。絶対的な矛盾のなかにおちいつた兵士たちが、その苦しみから自己を救うためにとつた手段が問題なのである。その苦悩にじつと耐えながら、そこから自分が参加している戦争について思慮をめぐらし、とみるという方向へはゆかず、かえつて自分の内心に人間のものをめざめさせ、それゆえに苦痛をもたらす姑娘の泣き声をその生命とともに抹殺するといふ手段をとること、その矛盾のもたらす苦痛からの脱出をはかつたといふことは、なにを意味するらうか。しかもその主役を演じた平尾は、インテリであり、出征までは新聞社につとめていた男なのだ。「ロマンチックな青年」だった平尾もまた「骨格の大きさに似合はず感受性の強い繊細な彼の神経は戦場の荒々しい生活のなかではひとたまりもなく崩壊しなければならなかつた。そして新しく彼の全身を動かかしはじめた神経は一種すてば

ちな闘争心であつた」が、それでも「戦争が暇なときには元の繊細な感情が甦つて来て彼を支離滅裂にしてしまふ」。してみれば、若い女の泣き声にたえられなくて、率先してその殺害にむかつた平尾の心理のうごきは、自己分裂をおこさせるものへの「すてばちな闘争心」の爆発であつたといふべきであらう。

たしかにあの泣き声を聞かされてゐる間は彼の感情は救はれる道をついてゐた。戦争といふことの国家的な意味はよく分つてゐて批判の余地はないが、戦争の個人的な意味の痛まじさがまざまざと思はせられて耐へ難い氣がして来るのであつた。彼のロマンティックなイシズムはこゝまで来てもまだ燻つてゐた。さうして彼女を殺すことが彼の苦痛を鎮めるものではなくて一層耐へ難いものにするであらうことも彼の感受性はよく知つてゐた。而も真先に立つて銃剣を振つたのは苦痛から逃れようとする必死な本能的な努力であり唯一の血路であると同時にロマンティックな嗜虐の心理でもあつた。

ここには、かれを窮地にたたせているいっぽうの極である戦争そのものを懷疑する知性は、「国家的な意味」といふ側面においては機能を停止してしまつていたといわねばならない。「国家的な意味」と「個人的な意味」とを統一的に追求し把握する主体が崩壊してゐたといふべきかもしれない。げんに兵隊として戦闘に参加してゐる

身にとって自己の行為の根底をささえる戦争の「国家的な意味」をうたがうことは、自己分裂をひきおこすか、自己抹殺を必至とするからである。母親をうしなつた若い女の立場に自己をおいて、それに「同情」できるといふのはかれの人間性がまだ鈍磨しきつていない、かれのなかにはなお人間がいてゐることをものがたるものだが、かれは戦争の「国家的な意味」という批判をゆるさない重圧と交換に、その人間的なものをまもることを放棄したのだ。人間性崩壊のたえがたさのなかで「彼が最もうれしかったのは四、五人の兵が彼と一緒に女を殺してくれた」ことにはかならなかつた。こうして着実にかれは自分を「兵士」としてつくりかえ強靱なものにしてゆく。

医学徒である近藤はおなじこの事件を平尾とはべつこのうけとめかたをしている。

かくも易々と人間の生命現象は終るのである。然らばこのはかなき生命現象に執着してゐる吾人の医学とはそも何であらうか。

否、吾人の生命とは何であらうか。生命とはこの戦場にあつてはごみ屑のやうなものである。医学はごみ屑にたかる蠅のやうな——彼はひとりて苦笑した。支離滅裂である。彼はあの女の死によつて心に何の衝動をも受けはしなかつた。それほど強健な神経をもつてゐた。乃至は感受性にびたりと蓋をしてしまふ蝶蝶のや

うな護身術を知つてゐた。(中略)彼は戦場にあつて戦場を客観し、しかもその客観に敗北しない強さをもつてゐた。(中略)つまり彼のインテリゼンスは戦場と妥協してゐたのである。

この事件より、もっとまえから「戦場では一切の知性は要らないのだ」とおもひさだめていた近藤は、この事件のあと「戦場の客観も新鮮さを感じなくなり慌しい闘争生活の中でそのインテリゼンスが鈍らされて行つたはてには、悪く戦場馴れがして何をするにも真剣味のない怠惰な兵」になつていた。近藤は戦場や戦闘をさういふものとしてわりきることによつて、はじめからみずからに苦痛をまねくことを巧妙に回避してゐたといえる。平尾ほどにも、自己のなかの「人間」との対面による苦しみをしらなかつたし、またしろうともしてゐない。それは、人間の生命をすくうことを目的とする医学研究と、戦場における人命の抹殺行為との極限的な矛盾が、痛烈な命題であるだけに、かれの人間性はほかのインテリのたれよりもはやく、しかも徹底的に破壊されていったというべきであらう。しかしそのようなかれでも「環境が戦場から盛り場に戻つて来ると、戦場との妥協が必要でなくなつた為であらうか、近藤一等兵は近藤医学士のインテリゼンスを恢復して来たやうで、あつた」「どれほど大きな生命の嵐の中を自分が通過して来たかをしみじみと考へて見ることができた。彼は眼がくらむやうな恐怖の戦慄が背筋を走るので

を感じた。そして忽ち、自分の命へのはげしい執着が胸を熱くして甦って来るのを自覚し、恐れ」る一面をなおもちつつけている。生命が危機にさらされる時、急激に人間がかわる、が、しかしその危機がさると、またもとの人間にたちもどっている姿が近藤をとおしてしましきも描きだされている。

平尾たちがその姑娘を殺害してしまったとき、おなじ塹壕にいて平然としていたのは笠原だけであった。かつて近藤がスパイ容疑の女を殺したときも、かれは笑いながら「ほう、勿体ないことをしたのう」といったのだが、こんどもやはり「勿体ねえことをしやがるなあ、ほんとに！」と「笑ひを含んだ声で呟いた」だけである。倉田や平尾や近藤などが、それぞれの自己葛藤のすえに、ようやくたどりついた地点に、なんの苦悩もなしにさいしょからたっている男なのだ。そしてかれこそ日本軍隊におけるもつとも優秀な兵士なのであり、そういう兵士たちになりきるために、倉田や平尾や近藤たちは感情と思想をつくりかえようとして懸命だったのである。その彼の呟きをきいて「神経の凶太さ」を倉田は「心の底から見事なものだと思った。羨しかった」という。

このようにみてくると、この作品に描かれている兵士たちの残虐行為が、たんにそれだけとしてとりあげられているのではないことがあきらかであろう。そこにいたるまでの人間崩壊の過程が、戦場

における生死の関頭にたつものの心理と行動として、また日本軍隊特有の思考放棄の過程として、そしてもつとも根本的にはみずから参加している戦争の意味を不問にふしてしまわねばならぬ状況として、描きだされていることをのみがしてはなるまい。「この程度の残酷が戦争につきものであるのは知れきったことだ、ともすれば簡単に割りきりたがるこの作者の『遅ましさ』を、ここから抽きたしたとしても、あなたがちに牽強附会の説ではない」とする平野謙の見解は、石川裁判における検事や判事とおなじように、その残虐場面へのみ眼をうばわれ、石川が克明に描きこんだ、それにいたるまでの登場人物それぞれの人間崩壊の苦悩の過程をまったく無視してしまっているといわねばならない。それを描いたことこそが、この作品をはかの従軍記録や兵隊作家たちの作品とちがって、文学の名にあたいするものになっているとおもう。「生きてゐる兵隊」とは「苦悩する兵隊」の別称であるともいえる。戦争・戦場という個人の意志をこえた巨大なメカニズムのなかにほうりこまれたとき、人間がどのように苦しみ、もたえ、なげきながら、生命の危機とたたかうものであるか、そのためにいかに自己強制的に軍隊組織にふさわしい兵士に自己をまきかえてゆくか、その結果、おもいもよらぬ残虐をおこなうか、そして、そのあと自己の行為を呪い、悔んで、いたたまれぬ心情にとりつかれるものであるか、それらのことが、

かれ流の簡潔単純な筆致で描かれている。したがって、山本健吉が「彼等の残虐行為を描きながら、彼等に深い愛情を抱いて書いている——言はばここにも、悲しい矛盾にみちた日本の国と日本人の姿が、象徴的に浮び上ってくる、と言へるのである。作者の意図においては、これは兵隊たちの行為に対する弁護の書でもあ<sup>②①</sup>」<sup>②</sup>という、そのほとんどに異論はないが、賛同しがたい部分もある。なぜならば、石川はこの作品に登場するすべての人物に「深い愛情」をしめしてはいないからだ。すくなくとも同情的に描かれていない人物がふたりいる。それは笠原であり、もうひとりとは破戒の従軍僧・片山玄澄である。笠原がもっとも兵隊らしい兵隊として設定され描かれていることはすでにその片鱗をみてきた。片山は兵隊でないにもかかわらず「左の首首に殊数を巻き右手には工兵のショベルを握って」逃げまどう敵兵の頭を割っていく。「さっきの殺戮のことを思ひ出しても玄澄の良心は少しも痛まない、むしろ爽快な気持ちさへあった」——かれには「戦友の仇だと思ふと憎い」という感情しかない。「さうか、国境を越えた宗教といふものは無いか」と西沢連隊長を無然とさせる僧侶として描かれている。してみれば、この作品のすべてが「兵隊たちの行為に対する弁護」をしようとしているのでないことはあきらかである。作者の兵隊たちをみる眼は、ひとしなみに同情的であったのではなく、なんの煩悶も苛責もなし

に殺戮者になれる笠原や片山のような人物には憎悪しかかんじていない描きかたをしている。つまり笠原と片山のばあいは、血も涙もない非情な人間におちていく過程がはぶかれているのである。そしてその憎悪が、倉田・平尾・近藤などをいやおうなしに非人間化してゆく戦場の「不思議に強力な作用」にたいする憎悪とむすびついているところに、この作品の戦争文学としての骨格があるとともに、またいっぽう笠原や片山をさういう一面的な人物として設定したことが、この作品をやや底のあさいものにしたこともいぬめない事実である。そういう一面性がでてきたのは、石川の意図が、個々の兵士を個性的にとらえるところにあつたのではなく、「戦場といふところはあらゆる戦闘員をいつの間にか同じ性格にしてしまひ、同じ程度のことしか考へない、同じ要求しかもたないものにしてしまふ」という、日本人とこの侵略戦争とのおそるべき関係を、戦争が人間をどのように歪めていく過程に焦点をおき、そのかきりにおいて兵士たちを個性的に描きわけたからだとみるべきであろう。「敵を軽蔑してゐるあいだにいつの間にか我とわが命をも軽蔑する気になつて行く」日本兵士の、ひいては日本人の悲惨な状況に作者はもっとも心をいたため、関心を集中していたとおもわれる。

②① 聴取書、

②② 傍線は発売禁止になつた「中央公論」において、編集部があ

らはじめ、伏字にしておいた部分である。

②② 注①におなじ。

②③ 石川はこの作品の題意について「死ヲ目前ニ扣ヘテ生残ツテ  
居ル兵隊ト云フコトト更ニ真実ノ人間ラシキ兵隊ト云フニツノ  
意味ヲ含メテアリマス」(公判調書)とのべている。

②④ 「石坂洋二郎・石川達三集」(講談社版・日本現代文学全集  
・86)「作品解説」四六〇頁。

## 3

石川は一九三七(昭和十二)年十二月十三日の南京陥落後、同月  
二十九日に東京を出発し、翌年一月五日上海上陸、一月八日から十  
五日まで南京に滞在している。そして「私ハ将校ニ接スルヨリ兵士  
ノ間ニ交ハリ其ノ話ヲ聞ク方カヨリ本当ノ戦争ノ姿カ摺ミ得ルト考  
ヘテ居マシタノテ彼地デモ将校トハ殆ント接セス兵士ノ話ヲ聞ク耳  
ヲ傾ケマシタ。ソシテ戦地ニ於ケル本当ノ人間ノ氣持ヲ見聞シテ来  
マシタ」といい、また「兵士ヨリ聞キタルコト」として「敵前上陸  
以来南京陥落ニ至ル戦鬪経過」「如何ニシテ敵ヲ殺シタカト云フ状  
況」「敵懐心ノ心理」などをあげ、「市街地、下関駅附近、水西門、  
中山門ニ於テ戦後ノ慘状ヲ視察」<sup>②⑤</sup>しているところから判断すれば、  
戦後あきらかにされた南京攻略に際して非戦闘員をふくむ中国人

「四万二千」<sup>②⑥</sup>の大虐殺という事実もとうぜんかれの耳にはいり、こ  
の作品の素材として吸収されたであろうと想像される。「約五万に  
上るこの町の軍隊は、一カ月以上にわたって、近世においては匹敵  
するものない強姦、虐殺、略奪といったあらゆる淫乱の坩堝を泳  
いでいた」<sup>②⑦</sup>といわれるこの事件は、当時、軍の嚴重な報道管制をう  
け、国民はまったく真相を知らずに、敵首都の陥落を祝って提灯行  
列にうかれていた。が、作者は日本軍乱行の期間の末期には、とう  
ぜん現地に到着していたはずである。首都攻防戦に直接従軍して激  
しい戦鬪による興奮の眼で日本兵の蛮行をみたのよりも、かれのは  
あい比較的冷静にその事態を観察・批判する餘裕があつたであろ  
う。兵士たちの「雑談や放言」から知りえた個々の事実をとおし  
て、この日本人にとって日本近代化の慘憺たる破綻のひとつを意  
味する大事件の实情をとらえ、しかもそのことじたいとして描くの  
ではなく(もとより事件に密着した暴露はとうてい当時の嚴重な  
管制下ではできなかつたわけだが)、そつう事件をひきおこした  
日本の軍隊と兵士たちの爆発的な野蛮行為を、その行為のもつと  
も根源的な原因とともに描きたそうとして、この小説は虚構を不  
可欠の条件としたとみることが出来る。もとよりこの事件のふくむ  
さまざまな事実は、戦後の研究や記録にてらしてみると、この作品  
のなかにそのまま吸収されている部分もある。たとえば「十四日城



内掃蕩、商店街の至るところに正規兵の服がぬぎすててある、みな庶民の服に着かへて避難民の中にまぎれこんだのだ」「本当の兵隊だけを処分することは次第に困難になって来た」とかれが書いているような事情はあったとされているし、また石川が南京滞在中起居をともにしたのは野田連隊だが、それを指揮した佐々木旅団長の記録にも「俘虜ぞくぞく投降し来り数千に達す、激昂せる兵は上官の制止をきかばこそ片はしより殺戮する」「抵抗するもの、従順の態度を失するものは容赦なく即座に殺戮」「不逞行為をつつつつある敗残兵も逐次捕縛、下関において処分せるもの数千に達す」などと書かれているくらいだから、これらの事実がかれの見聞にはいつていたことはまちがいないだろう。が、石川の描きかたは、現実の虐殺事件そのものをとらえようとはしていない。作品展開の主要部分を南京攻略までの戦線に設定し、その諸戦闘をつうじてくずれていく兵士たちの人間性と、それにともなう生ずる行動を描き、客観的にはその帰結として南京事件をみる立場にたっている。したがって、かれの南京事件のうけとめかたは、事件の諸場面にたいする反撥的な表現として定着されたのではなく、日本人の人間としての敗北にふかかうちのめされたものの悲哀と憤怒をその基調にもち、そのためにその人間的敗北にいたった経緯をあきらかにしなければおかないという構成と展開をとらざるをえなかったというところに

みるべきであろう。その意味で、かれはこの事件に現地で際会したほかのどの作家よりも、深甚の打撃をうけたといえるのではないか。このばあい、かれをもっともつよくとらえていたのは、こういう凄惨な場面を現出した日本人とはなにか、というやりきれない想念ではなかったらうか。すくなくともこの一篇の創作モチーフにこの南京事件がふかかかかわっていることとは不当な見解ではあるまい。「實際ノ戦場ヲ見ルニ及ンデ一般人ノ戦争認識ト云フモノガ如何ニオ目出度イモノデアルカヲ感ジ」「真ノ戦争ノ姿ヲ一般ニ見セルコトガ出来ルナラバ之ハ決シテ無駄ナ努力デハアルマイ」と考えたかれの創作動機の説明と、前掲の「国民ハ出征兵士ヲ神様ノ様ニ思ヒ……」という陳述とこの作品とをかさねあわせると、これらのことばの表面的な意味の底に、戦争の残酷な真相を告発せずにおかないはげしい作家精神をよみとることができる。その精神をささえているのは見聞した兵士たちやその行動のなかに日本人の人間としての崩壊をみた悲哀と憤怒ではあるまいか。

このことは作者が中国および中国人をどのようにとらえていたかということも無関係ではないはずである。かれは火野葦平のように中国民衆を「愚昧」とはみしていない。「お互ひに生命の危険にさらされてゐる場合、しかもそれが個人的な意志から出たものでなくて国家的な作用であるだけに、一つの垣根をとりはづして接近して

みると、互ひに相あはれむ同病の患者であった——ここには火野につよくあらわれていた民族的優越意識はまったくみとめられない。国家権力に酷使される犠牲者として日本兵をも中国兵をもとらえる視点があるばかりでなく、日本兵が「一番平和な心の安らぎを感ずるのはかうして支那人とかたことの話話を交すときであった。

しかし、さういう平和な時間にあつても、支那人を軽蔑する気持が消し去り難く頑強な深い根を彼等の心の底にのこしてゐる点をもけつてみのがしていない。また捕虜処刑の場面を描いて「泣きわめく声之急に止んだ」「残つた者はびたりと平たく土の上に坐り両手を膝にのせ、絶望に蒼ざめた顔をして眼を閉ぢ顎を垂れて黙然としてしまつたのである。それはむしろ立派な態度である」といふとき、おおくの作家のように日本民族になまいきにも敵対する中国民族といふとらえかたではなく、同一民族のなかにおける支配者、被支配者の関係としてとらえる視点と、日本民族が歴史的にせおつてきている中国民族蔑視への批判とをあわせもち、そのことによつてインターナショナルで人間的な立場にたつてきている。そのようななかれたからこそ南京事件における人間的敗北への悲哀と憤怒がその根源にあつたはずだと考えられるのである。

ところが、かれは「一塊ノ砂糖ヲ盗ツタ支那人ヲ殺スノハ戦争ノ場合充分ニ殺スタケノ理由カアルト認メテ書イタ」ともいふ。武井

上等兵が連隊長の料理用に秘蔵していた砂糖を使役の「十七、八歳の支那人」に盗まれたのをみつけ、無造作に殺害した作中の事件について陳述したものが、この「戦争ノ場合充分ニ殺スタケノ理由カアル」というのは、どういふ意味だろうか。殺すのを正当とする立場と正当ではないがやむをえない、戦場の必然としてでてくる行為とする立場とが推測されるが、公判廷では判事がそれ以上追及していないところを見ると、あるいは前者の意味にうけとつて諒解したのかもしれない。しかし作品についてみると、作者はその殺害の場面にたまたまいあわせた近藤一等兵につきのような感想をいだかせている。「一塊の砂糖は一人の生命と引きかへられるのである」そして「またしても生命とは何ぞやであった」といふことから、

ここで彼はふとクリストの言葉を思ひ出した。雀は「羽一銭にて売らるゝにあらずや、されど神はこの雀をも美しく造り給ふなり。雀の生命と人間の生命と何の相違もありはしない。人間の命は一塊の砂糖と交換せらるゝにあらずや、されど神は儻チヤたちをも美しく造りたまふなり。

しかし近藤はこれからは例によつて思考を放棄してしまふ。武井もまた連隊長のために砂糖いりの料理がつくれなことを悲しがつて涙をながし、殺したあとは飯もくわずに茫然とすわりつづけている。温情的な上官と上官おもしろいその忠実な部下との関係がひき

おこす惨劇、「されど神は憐れたちをも美しく造りたまふ」と考える兵、これらを同時に描きたしている石川の思想は、判事がうけとったであろう解釈をひきださせるようなものだったろうか。「惨忍な場面ヲ書クニ当ツテソレガ単ナル惨忍ニ終ルベキテナイト信ジ必ラズ正当ナ理由アツテノ行為デアアル様ニ書イタ」ともいっているが、この「正当ナ」というのも、取調べの警部には「当然の、したがって非難すべきでない」というほどの意味にうけとられるいいかたである、——あるいは、石川はほかの表現をつかったのに、警部はとり調べた石川が屈服したとみて「正当ナ」ということはをえらんで記録したのかもしれない——が、作品のがわからみると「必然的な」という意味としてうけとらざるをえない、そういう微妙ないいまわしである。これらの例は戦術的に石川がかなり苦慮した表現を陳述にあたってとったのだとみるほうが妥当ではあるまいか。

しかし、このようにみえてくると、破戒の従軍僧・片山玄澄の殺人行為にふれて「石川は、これをいいこととしては認めていない。しかしこれも戦争のなせるわざとして、その限りでは放任し肯定する」とか、さらには「戦争そのものの性格には全く目をむけない」とかという中野重治の理解とは正反対の解釈にたつことになる。たしかに石川のはあい、この作品にかきらず、それ以前の「蒼氓」「日蔭の村」にしても、このような解釈をひきださせる傾向をもっている

ることはみとめねばならぬだろう。しかし、その是非をあきらかにするためには、かれの作風の基本的な性格をあきらかにしておく必要がある。この作品にそくしていえば、戦争の惨虐を惨虐として国民が認識し、それでもなお戦争遂行に力をつくそうとする立場にたつか、戦争否定の方向へむかうか、そのいずれへもむかいうる可能性をはらむところまでしか描いていない。つまり、文学のなかの大状況——このばあい戦場・戦闘という枠ぐみ——は、できるだけ事実にくくして忠実に再現し、そのなかで被害者を擁護する立場からの批判精神を発条として、断片的には事実を利用しながら人間像を創造し、その枠ぐみの内側を追求するというのが、かれの文学方法の特徴である。「部隊ノ移動進撃状況モ概シテ野田部隊ノ事実」に依據し「之等仮定ノ人物ニ各地各所デ聞イテ知り得タ事件ヲ配列シ活動セシメタ」といい、いっぽう「小説ト云フモノハ元來仮定ノ事ヲ實際ラシク書キ表ハス」「今回事変ニ取材シタ仮定ノコトヲ事実ラシク書ク事モ其ノ平素ノ創作方法ヲ行ツタノミ」ともいっているのはこのかんの事情をものがたっている。しかもその状況の枠ぐみは不動のものとして設定されるのであるから、追求される人間とその状況との対立までは描かれるけれども、その衝突をとおして状況が変革されていくという方向へはむかわず、きまって人間が状況につぶされていくって終結をつける。したがってかれの文学方法にお

ける虚構とは、不動の枠ぐみのなかで生きる人物たちの創造という限定された意味においていえることである。ただ注意しなければならぬのは、その大状況そのものは石川にとって、はじめから否定すべきものしかとりあげていないという特徴を最近作の「金環蝕」まで一貫してもちつづけてきていることだ。かれのこういう否定のしかたとその文学化という点が看過されることによって、さまざまな解釈や誤解が生じる。ところが根本的にはそういえるのだが、事実に依據する枠ぐみの設定と、そのなかで被害者の人物を創造し、しかも極度に作者の主観の表出を抑制しながら、人間の敗北への経過が描出されて終結するために、あたかもその状況を「放任し肯定」しているかのような印象をあたえる。根本的には事実によりかかり、それにつよく制約されながら、わずかに虚構という手段を駆使するこの創作方法は、主観の表出の抑制がつよいこととあいまって、このような誤解をまねきやすい。

かれがこういう方法をいわゆる社会小説系列の作品の基調としているのはなぜだろうか。それにはまず国民を支配する広い意味での現実政治へのつよい関心のあることが指摘されねばならない。政治に左右される農民の運命への関心が「蒼氓」「日蔭の村」を書かせたし、戦争のメカニズムによって国民の人間性が破壊されてゆくことへの関心がこの作品をうませたのだ。かれにとって多くの国民の

おかれている現実の政治状況とそれに支配される国民の生活や人間性をもっとつよい関心のまとなっている。その関心をささえているのはかれの国士的危機感と被害者擁護を根幹とする国民意識とである。しかしその国士的危機感は明治らしい国家主義とかならずしも明確に絶縁しているとはいいきれず、にもかかわらず、いっぽうの被害者擁護の国民意識と微妙にからみあう関係にあるために、この作品でみられるように、戦争そのものへの基本的な立場や思想は明瞭に形象化されなのまま、しかもその戦争のなかにあらわれる非人間的な現象を克明に描写していくという性格をもつことになる。

その時代に住んで私はその時代の戦争しか描き得なかった。「聖戦」といふ言葉も信じてはゐなかつたが「侵略戦争」といふ言葉にも疑ひをもつてゐた。(中略)私は戦場に於ける戦争のみ描いた。<sup>⑧</sup>

と戦後かれ自身が述懐しているとおりである。したがって、かれにとって否定すべき現実と、その現実のなかに生きる人間像とがじゅうぶんな必然的關係をもつものとして描きたされず、両者の緊密な關係がすこしでもそこなわれると、基本的にかれが否定すべきものとしてとらえた状況が否定の対象としてうかびあがってこないで、むしろ状況埋没の印象をあたえるようになる。つまりかれの文学いざ

んの題材選択においてはたらく否定の思想による現実とのたたかいが、作品のなかにたたかいたかいたとして昇華・結実しない結果を招来するのだ。したがって、かれの根本的な否定の意図がよみすぎされ、むしろまったく逆の意味をもつものとしてうけとられる弱点がひそんでいるのである。

しかし、そうはいっても、この作品でかれが描きだした日本兵の惨虐行為と、そこにいたる必然的経過とは、やはり読者をして、かれの意図をこえて、戦争そのものの本質にまで想到させるリアリティをもっているといわねばならない。「若気の至り」とはいえ、また人間形象が一面的であるとはいえ、当時「禁止洩レノ雑誌ヲ読ンダ人々ガ『一大愛國詩なり』等々ノ評ヲ与ヘテ呉レタ」事実、第二審公判に、のちのゾルゲ事件で死罪にとわれた尾崎秀実が在廷証人としてかれを弁護したこと、平野謙ら（注②⑤参照）に、かれが南京攻略戦に従軍したと信じこませたリアリティなどをみのがしてはならないであろう。すくなくともあの時期に「皇軍」の「在る姿」をここまで描きだしたことは、文学史的事実として確認され、評価されねばならないはずだ。

②⑤ 清水文二警部の聴取書による。したがって平野謙や板垣直子らが「南京攻略に参加した」としているのは誤りである。

②⑥ 公判調書。

戦時下の文学へその二〇

②⑦ 聴取書。

②⑧ ②⑨ エドガー・スノー「アジアの戦争」（みすず書房「現代史大系」3）四五頁。なお井上清「日本の歴史」下巻（岩波新書）には「男女二十数万人を虐殺した」とある。

③⑩ 今井武夫「中国との戦い」（人物往来社「近代の戦争」5）一〇九頁。

③⑪ 佐々木到一「南京攻略記」（集英社「昭和戦争文学全集」別巻「知られざる記録」所収）二五四頁。

③⑫ 聴取書。

③⑬ 公判調書。

③⑭ 聴取書。

③⑮ 「解説」（河出書房「現代日本小説大系」第五十九卷）三二四頁。

③⑯ 聴取書。

③⑰ 「時代の認識と反省」（六興出版社「書齋の憂鬱」所収）一〇六頁。

③⑱ 聴取書。

③⑲ 新潮社版「石川達三作品集」第十二卷「年譜」三一八頁。

一九三八（昭和十三）年九月五日、第一審公判の判決をうけ、そ

の中旬、石川はふたたび中央公論社の特派員として武漢攻略戦に従軍<sup>④</sup>、十一月帰国して、たたちに「中央公論」一月号に「戦史の一部として」の副題をもつ「武漢作戦」を発表した。

……目的とするところはただ内地の人々に戦争の広さと深さ、戦争の複雑さを知って貰ひたい事にあつた。即ち筆者は出来るだけ忠実な戦記を構成して見ようとした。小説ともつかず記録ともつかぬ中途半端なものになつてしまつた。(中略) 前回は戦場にある個人を研究しようとして筆禍に問はれた。今回はなるべく個人を避けて全般の動きを見ようとした……

とみずから作品に付記しているように「生きてゐる兵隊」が、ひとつの部隊に焦点をしばり、そのなかの数名の特定人物を追跡することによって、南京攻略までの経過を描いたのとはちがつて、この作品では一貫して追求される部隊も個人も登場せず、「武漢作戦以前」という章からはじまつて「襲はれる兵站線」「九江は混乱せり」「敵前上陸」「傷兵」「杉浦部隊包圍さる！」などをほさき「最後の章」にいたる三十一章からなり、それぞれの章が独立しながら、ぜんたいとして武漢攻略戦の全貌をいろいろな場面の集成でしめそうとする構成をとっている。

ほかの従軍記のほとんどが、たとえば林芙美子の「北岸部隊」は、作者自身がそのまま「私」として登場し、その眼をとおして戦

場が描かれるのだが、この「武漢作戦」ではいちども「私」があらわれない。また丹羽文雄の「還らぬ中隊」では酒井という新聞記者が設定され、ほとんどが酒井の体験のかたちをとり、ごくわずかな章で一篇の中心人物・三宅少尉そのひとの内面が酒井の観察から独立して描かれているという構成と方法をとっている。が、その酒井は丹羽じしんの体験にかなりよりそつていると推測される。しかし、石川のは、作者じしんをおもわせるいかなる人物も登場しない。その点、まったく前作とおなじである。もしこの作品が前作の筆禍事件にこりて再度の災難をふりはろううために、権力への迎合を意図していたのなら、むしろ「私」として登場し戦争の肯定や賛美を積極的に証明するかたちをとつたであろうが、じつさいはそうならない。伏字がわずか三方所にすぎないという事実は、かれが前回にくらべてかなり慎重にかまえて執筆したことを想像させるけれども、そういう配慮にだけ支配されていたとおもえない。前作までの方法上の特徴であつた、作品いせんに否定の思想がはたらくという点は後退して、あきらかに肯定の思想にそれはとつてかわられてゐる。したがつてその点のみを強調すれば、かれの時代風潮への妥協を指摘することができるであらう。しかし、そのかわりにこんどは部分的にかれの反撥や批判がこめられる方法をとつてゐる。すでに指摘したように、構成そのものが従来の作品のそれとち

がって、作戦進行の時間的経過が主として各章をつらぬく基調であり、一貫したかれの思想に依據した構成ではない——そのことによってふたたび筆禍をまねくことをあらかじめ回避した——ために、かれは従来の方法をここで転換させ、かれの思想と抵触しない場面を各章にあてはめることでせんとたいを構成し、かれの反撥や批判はそのなかの部分的な小場面限定する方法をとっている。この方法は当時のかれとしては、かろうじて自己の本来的立場——自己の批評精神を防衛するための苦肉の策だったといえるのではなからうか。すくなくとも、この作品をもって、かれの権力への全面的屈服とみることはたたくないといわねばならない。

とはいえ、前作にくらべると、たとえば中国兵にたいするみかたなどに微妙な変化があらわれている。

彼等の聖壕はそのまゝ彼等の幕場となった。その戦闘は壮烈勇敢なものであったが、その勇敢さは自分の身の安全を計らうとするためのものであって、身をすてゝ進撃する兵の勇敢さとは根本的に性質の違ふものであった。

ここには前作における中国人観をふまえながら、身をよじって当時一般の中国人観によりそっている作者の苦渋な妥協の姿がみられるが、かれのこの種の妥協は、「皇国」「聖戦」「皇軍」などという、非国民とよばれないための免罪符ともいふべき当時の流行語を、そ

れぞれ一回だけしか使用していない事実からもわかるように、決して完全に魂を権力にうりわたしたそれではないし、また擬裝転向ともちがう。この作品の末尾で、

日本の忘れ易い国民がこの大戦争のすさまじさを忘れるときが来たならば、残るものはたゞ彼の傷ついた不自由なからだばかりである。(中略) 彼等傷痍軍人のうへに生涯の平和と幸福とが甦ってくる日まで、戦捷の完全な喜びは保留さるべきものであった。というとき、かれ本来の文学精神が鱗然と頭をもたげているといえるばかりでなく、こんにちでもなおこれは生きている文章であることをみとめねばならぬ。悪徳商人のぬけめのない進出、ひとりよがりの占領政策、心服していない中国民衆、戦えばかならず勝つとうぬぼれている日本軍などの点描は、さりげない表現であるが、ひめられたかれの底意をよみとることができる。この作品では妥協とみとめるべき側面をもちながら、その文学精神と創作方法をかろうじて堅持し、権力への抵抗をまったくは放棄しなかったことを指摘すればたりるであろう。

「武漢作戦」以後も、かれの抵抗はときにふれて表面化し、戦局が不利なるにつれて、その発言は激越の調子をおびてくる。警察がしくんだ横浜事件<sup>④</sup>がついに中央公論社・改造社を「自発的廃業」

という名の強制解散においつめた一九四四（昭和十九）年七月十日から、わずか四日後にかかは「明るい批判に民意の高揚」を副題とする「言論を活発に」という論説で、無謀ともいえるおもいきった発言をしている。

今日言論統制はその方法を誤り、もしくは蔽に失して言論抑圧の傾向を生じてゐないか。（中略）言論を抑圧すれば民衆は反抗し反抗を弾圧すれば民心は沈滞する。今日、言論關係における人心の沈滞は寒心に耐へざるものがある。（中略）ここにいふ正しき言論とは決して当局に阿諛する言論をいふのではない。今日指導者の一部は民衆の批判を許さない。ここに大いなる暗さが生ずる。（中略）戦況不利の場合、当局はきびしい批判を受けなくてはならない。しかしそれは戦争の衝に当れる者として当然受くべき批判であつて、これを回避してはならない。（中略）先づ言論を活発化して民衆に声を与へよ。<sup>③④</sup>

「生きてゐる兵隊」事件で受難をともした中央公論社が、ファシズムの兇暴な爪牙にかかつてとりつぶされた段階にいたつて、暗にその不当をなじりながら、言論の自由を要求した不屈の闘魂ときびしい作家精神がこの一文にはみなぎつてゐる。

作家はもはや自分の一切を失つた。たゞ残つてゐるのは、作家の人格のみである。（中略）一切を失つた後に吾々が有するものは

却つて最大限に自由活動の範囲である。（中略）大臣大将に向つて怒罵を加へることも出来れば、一工員となつて油にまみれることも出来る。<sup>③</sup>

とも文学報国会の機関誌「文学報国」に書いている。そして敗戦直前の小説「成瀬南平の行状」<sup>④</sup>でふたたび警視庁のとり調べをうけ、ついに中絶せざるをえなくなつた経験をもつ。縣民の困苦をよそに食糧の二重配給をうけて平然としている縣知事・保坂甚次郎をはじめ、官僚たちの行状を暴露し揶揄する成瀬南平の痛快な行動を描いたこの小説は、そのするどい批判性のゆえに官権の怒りをつつたのであろう。そして敗戦をむかえた。

④ この従軍を筆禍事件の贖罪のためとみるのはどうであらうか。当時、陸軍省に勤務する少佐の実兄があつたなどの事情から、表面的にはそううけとられるふしもあつたかもしれないが、警視庁や公判などでの応答からみると、処分をうけた前作とそれをめぐるかれの主張の当否を実地に検証しようとする、ひめられた意図があつたのではなからうか。

④ 美作太郎ほか「言論の敗北」（三一新書）、黒田秀俊「昭和言論史への証言」（弘文堂）、畑中繁雄「覚書昭和出版弾圧小史」（図書新聞社）などに詳しい。

④ 「毎日新聞」昭和十九年七月十四日。



④⑤ 城市郎「発禁本」(桃源選書) 八四頁。

④⑥ 「毎日新聞」に昭和二十年七月十四日から二十八日まで十五回連載し、中絶した。

5

自由な創作活動が不可能であり、しかも作家たちが、お互いからも国民からも孤立してしまっていた戦時下において、石川にこのような抵抗をさせたのは、思想的なそれというよりも、むしろかれの資質と生活態度と文学精神が最大のよりどころであったというべきではあるまいか。戦争の本質的把握という観点からすれば、思想的には不明確であったといわねばならない。そういう不明確さをもっていたにもかかわらず、かれの政治的社会的関心のつよい現実主義的作風の根底をなしている国士的危機感と被害者擁護を根幹とする国民意識とが、かれを文学において日本近代化の悲惨な破綻と対決させたばかりでなく、裁判における証言でもあきらかなように、それがかれの生活をも律する統一的な人間的原理であったことをみながしてはならないであろう。そういう被害者としての国民によく共感できる生活と資質にねぎした人間的な思想は、肉体化されない観念や思想とちがって、よりよいには転向しない強靱な生命力をもつことを、かれの戦時下の文学と発言にみることができる。

戦時下の文学へその二〇

付記

戦時下の文学関係の資料は、こんにち入手はおろか閲覧にも多大の困難がともなう。湮滅・所在不明などの事情による。また、作品や評論は戦後削除・改作されているばあいもある。本稿の「生きてゐる兵隊」事件の公判関係の資料もながいあいだその全貌を知ることができなかった。部分的には「石川達三作品集」(新潮社)の久保田正文の「解説」、瀬沼茂樹「現代作家筆禍帳」(河出書房新社「現代文学の条件」所収)などに紹介されていたが、ようやくその全貌に接することができたのは石川達三氏のご好意による。また、その幹旋には国会図書館の中村恵司書をわずらわした。ともに深甚の謝意を表する。

(六七・一・一八)